

岩手医科大学の軌跡（3）—誠の医療の拡充—

平林 香織, 芳賀真理子, 渡邊 剛

(受理 2017年10月18日)

1 はじめに

2017年4月、岩手医科大学は創立120周年を迎え、記念刊行物として『岩手医科大学120周年記念誌—誠のあゆみ、未来へつづく—』（2017年4月、以下『120周年記念誌』と略す）を刊行した。その編集過程で、さまざまな資料やできごとを整理し後生に語り継ぐことの大切さを痛感した。そこで、従来あまり顧みられなかったことがらを中心に「岩手医科大学の軌跡」と題して小文を認めて、資料を紹介してきた⁽¹⁾。本稿は「岩手医科大学の軌跡」(1)・(2)に続く第3稿である。本稿をもって著者らによる岩手医科大学の歩みの振り返りを終了する。

本学では120年の歩みを次の6期に区分している。

期名	期間	トピック
第1期 草創期	明治30年(1897)4月～昭和2年(1927)12月	医学校付設
第2期 黎明期	昭和3年(1928)1月～昭和17年(1942)3月	医学専門学校
第3期 揺籃期	昭和17年(1942)4月～昭和30年(1955)12月	医科大学
第4期 拡充期	昭和31年(1956)1月～昭和62年(1987)12月	拡充計画
第5期 発展期	昭和63年(1988)1月～平成16年(2004)3月	第2次拡充計画
第6期 躍進期	平成16年(2004)4月～平成29年(2017)3月	薬学部開設

前稿と前々稿では、それぞれ草創期と黎明期を扱った。明治維新後、本邦では医学教育の制度が整うまでにさまざまな紆余曲折を経ており、本学もまたその荒波に揉まれ続けた。本学草創期・黎明期は、大海の波濤を次々と浴びながらも、創立者・三田俊次郎の医育への情熱のもとで、「誠の医療」に進路をとった航海であった。

そしてそんな時代の証言として、旧稿ではそれぞれ2点の資料を紹介した。草創期の『岩手病院岩手医学校岩手看護婦養成所岩手産婆学校及ヒ其他ノ事業十年間ノ経営概要報告』（岩手県立図書館所蔵。以下、『経営概要報告』と略す）と、黎明期の岩手医学専門学校開校記念・後藤新平講演原稿「現

1) 岩手医科大学 教養教育センター 人間科学科文学分野

2) 岩手医科大学 学務部 図書館事務室

3) 岩手医科大学 学務部 キャリア支援センター事務室

代ノ医学」(奥州市立後藤新平記念館所蔵)である。前者は、本学の歴史が明治30年(1897)にさかのぼることを立証するものであり、後者は、後藤新平直筆の朱書きが入った講演原稿である。どちらも10数頁以下の小さな資料である。しかし、資料そのものについてはいうまでもなく、周辺資料からもきびしい社会情勢や経済情勢の中で、地域医療と医療人育成のために心血を注いだ俊次郎の情熱が伝わる。『経営概要報告』は『岩手医科大学四十年史』(1968年6月)以来その存在が知られていたが、本学設立年の根拠資料として脚光を浴びたのは最近のことである。「現代ノ医学」は長く後藤新平記念館に保存されてきたが、本学関係者にその存在は知られていなかった。また、後藤新平記念館に大切に保管されてきたボーイスカウトの制服を着た後藤新平と三田俊次郎夫妻らが本学で撮った記念写真は、貴重な初出写真として『120周年記念誌』の1頁を飾った。

黎明期に続く第3期は、6つに区分された本学の歴史のなかでもっとも短く、14年間しかない。昭和17年(1942)から昭和30年(1955)、第二次世界大戦を挟むこの時期、本学も塗炭の苦しみを味わった。しかし、戦時下にあっても医育の灯火は消えることはなかった。戦後の新制岩手医科大学設置認可、そして第1次から第5次に及んだ拡充計画の実現へと発展の道筋がまっすぐに続いていく。

本稿では、混迷の時代を耐えて拡充の大海原へと行路を拓いた本学の姿を照らし出す光源として、本学附属図書館所蔵の小さな和綴本を紹介したい。岩手医学専門学校病理学教授だった内山泰^{うちやまとおる}氏の七回忌に刊行された『泰巖餘光』である。

この小さな本から伝わる医育への情熱は、文字通り泰然とした揺るぎない巖^{いわお}のような強さを秘めたものだ。拡充期には創立40周年、50周年の年史が編まれ、各種記録類や活字になった教室史なども多い。写真も多く残されている。しかし、混乱を極めた時代で物資も乏しかった揺籃期の資料は少ない。卒業アルバムも医専7期生(1938年3月卒業)の1冊しか残っていない。『泰巖餘光』はそんな時代の状況が切実に伝わってくる貴重な資料であるが、今ではその存在が知られることもなく、また、内山泰氏のことを知る人もほとんどいない。時代を検証し、本学の歩みの道標として、ここに『泰巖餘光』を紹介し、『泰巖餘光』前後の事実について明らかにする。

2 『泰巖餘光』のこと

本学附属図書館は、盛岡市中心部の内丸キャンパスにある本館と、そこから12キロほど南下した矢巾キャンパスの分館とに分かれている。1972年に竣工した4階7層建、20万冊を収容する本館3階廊下の書架には、本学の年史や教室史、各講座の教授の定年記念誌など本学関連刊行物が並んでいる。創立120周年記念出版物のために編集委員会が発足した際、その書架から多くの資料が持ち出された。革張り・布張りの立派な表装の卒業アルバムや金の背文字のどっしりとした教室史などに混じって、四ツ目綴の和装の小本があった。表紙の中央に貼られた題簽に書かれた毛筆体は判読しづらくなっていたが、『泰巖餘光』と読める。ページを繰ると、それが、内山泰氏を偲ぶ追悼文集であることがわかった。

『泰巖餘光』書誌

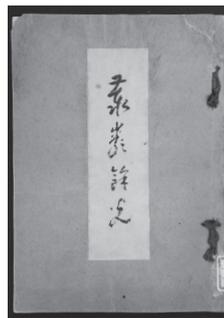
縦21センチ×横15センチ 全95頁

薄茶色無地表紙。

表紙中央に題簽(15センチ×4.3センチ)。

四ツ目綴。綴じ紐は茶色8ミリ幅の平紐。

刊記：昭和二十六年二月二十日印刷／昭和二十六年二月二十五日発行／発行人 盛岡市大清水小路



松谷忠彦／印刷所 盛岡市六日町一二三 富士屋印刷所

見返しには内山泰氏の肖像写真が掲載され、扉には、内山泰氏の禅の指導者である臨済宗妙心寺派管長・三浦承天（1872～1958）老師の墨蹟「庭前花落木猶香」（庭前の花木より落つるも猶香し）の写真が掲載される。巻頭は、「内山先生最後の御講義」と題する二宮以敬氏（医専16期生）の講義録である。続いて「先生のお便り（戦地の弟子へ）二編」がある。年譜に次いで、三浦承天老師を筆頭に、第2代本学学長・藤田敏彦をはじめとして、同僚や教え子ら35名の追悼文が並ぶ。

内山泰氏のプロフィールは次のとおりである。

明治	28年（1895）	1月	新潟県中魚沼郡蘆ヶ崎村生まれ
大正	3年（1914）	3月	長野県立飯山中学校卒業
同	年	7月	第二高等学校第三部入学「道交会」入寮
同	6年（1917）	7月	東北帝国大学医学部入学
同	10年（1921）	7月	東北帝国大学医学部学士試験合格
同	年	同月	東北帝国大学医学部病理解剖学教室助手
同	13年（1924）	1月	東北帝国大学助教授
同	15年（1926）	2月	ドイツ、マールブルヒ留学
昭和	4年（1929）	3月	帰国
同	年	8月	脂質のコレステリン代謝に関する研究により医学博士
同	11年（1936）	11月	岩手医学専門学校・病理学教室教授
同	12年（1937）	11月	学内仏教会「帰敬会」設立
同	18年（1943）	5月	長松院にて第1回盛岡禅道会（同会設立に助力）
同	19年（1944）	7月	死去（49歳）。戒名「泰巖居士」

『泰巖餘光』に掲載された第二高等学校及び東北帝国大学医学部の同級生だった黒川利雄氏（第10代東北大学総長）の追悼文によると、内山氏や黒川氏が仙台で入寮した「道交会」とは、仏教の求道者らによる自治寮であったという。あとで述べるが、勉強のかたわら松島瑞巖寺に参禅し、三浦承天老師に学んだ内山氏は、病理学者であると同時に禅の求道者でもあった。氏がいつごろから禅道を志したのかは明らかではない。「道交会」での暮らしが、その後の精神生活を方向づけたものであることは間違いないだろう。

3 最終講義について

『泰巖餘光』巻頭には亡くなる1ヶ月前の講義録が掲載される。筆録したのは医専16期生（1948年卒業）の二宮以敬氏である。「内山先生教壇最後の御講義」と題され、冒頭に「昭和十九年五月二十六日午後二時半より、急激に暑気加わる」とある。巻頭肖像写真からわかるが、ちりとした体躯の氏とは見間違える姿に息をのむ教室の緊張感が次のように描写される。

颯爽たる御英姿は何処、病み疲れたる教授は今杖を片手に、静かに教壇に登る。一步一步、見るからに悪液質性疾患と解る。その顔色の蒼さ、御体の弱々しさ。三ヶ月前と変わらないのは、唯その眼、炯々として全教室を圧する。御起立のまゝ名簿を取り始めらる。一人一人に丁寧なる

頷きの挨拶。一同肅として身動きする者なし。

以下、講義録が続くが、講義内容を正確に口述筆記する聴講態度は、現今の学生とは隔世の感がある（傍線は引用者による）。

手術を受け我輩に未だ余生が幾分でもある事に気がついた瞬間から、一日も早く教壇の上に立ち、親しく諸子を導きたいと云ふのが我輩の第一の希望であつた。出来るだけの治療を受け又努力して体力の恢復を計り一日も早く諸子に面接せんことを只管念願して来た。体力未だ整はず、病勢未だ逼塞の域に達せざるも今日此処に望を達して壇上に立ち親しく諸子の元気澁刺たる面貌に接することを得たのは、実に我輩の非常な喜びとする所である。

我輩は常に言ふ。「青年は積極的でなければならぬ。常に進歩的であらねばならぬ。」と。一日と雖も現存に休止してゐてはならぬ。休止は即ち退歩墮落を意味する。何故なれば積極的であるとなすか、それは今吾人の目的とする処にどれだけ近づきつゝあるかと云ふことである。目的とは云ふまでもない。我が皇国の明日の運命を担う立派なる医士となることは是である。それが吾人の終生の目的であらねばならぬ。先生でも医者でも博士でもない。飽くまでも医士とならねばならぬ。

（間をおき腰をかけられる）

今や戦争は苛烈である、戦局は重大である、諸子の身辺環境は或は変化することがあるかも知れぬ。然し諸子よ、諸子に与へられたる皇国の信頼は如何なる事が起ろうとも寸毫の変化すらない、故に諸子の使命に於ては、永劫に不変なのである。諸子の信頼とは何か。それは皇国が尊い人命を諸子へ委託してその治療を許すと云ふことである。

諸子の使命とは何か。それはこの信頼に添ひ得る立派な医士となることである。如何に諸子の周辺が騒然とすることがあつても、如何に諸子の心境が動揺することがあつても、皇国の信頼と、それに対する諸子の使命観とを一時たりとも諸子の脳底より去らしめてはならぬ。使命観を常に抱く為には峻厳なる克己心を必要とする。学業そのものも難しい。使命達成は更に困難である。然しその使命達成に日夜尽瘁する事が諸子の道なのである。之を惜いて諸子の歩むべき道はない。若し諸子が此の道を踏み外す時があるならば、その時既に諸子の人格は零となり、又諸子の存在価値は無となる。否諸子一個人に限るのではない。それ以上に皇国の信頼に背反したる憎むべき背徳者となる。此の上の不忠はないのである。

山中の賊は破るに易く心中の賊は破るに難し。

山中の賊を破り而も心中の賊をも破り得る者それが真の勇者である。この勇者にして始めて我輩の云ふ「文武一如」の名を許すことが出来る。

（静かに立ち、チョークを握り大きく一期一会と書かる）

一期一会

茶道に一期一会と云う言葉がある。茶道は承知の通り鎌倉時代以後の血腥い戦陣の合間に武人の嗜みとして、一時を閑寂の境に過し、その間に心を練り真の人間をつくると云ふ意味に於て発達して来たものと聞く。この茶道に於て無上に尊ばれる心の持ち方、それが一期一会の心である。茶碗一つの動き布巾を折りたゝむ僅かな仕種、静かな香、その中に永遠の相を感じ取るのである。その刹那に於てその後一生涯繰り返へされる事のない「動き」あるを感得するのである。

昭和十九年五月二十六日午後二時半、この時は今や過ぎ去つて、再び帰ることのないものである。再び廻り来ることのこの宇宙の上に断じてないと意識するのが一期一会の覚悟である故に、

如何なる事にも些かの緩みもなく発揚されたる全身全霊を尊ぶ心である。我輩自身、今教壇に立ちて諸子と相会しつゝ、一期一会の感の油然として胸中に満して来るのを感じるのである。

凡そ学究の徒にとつて最も大切なのはこの覚悟である。一刹那は既に過去であり、死の世界である。又一刹那は未来であり、未知の世界である。

時局は苛烈である。前途は多難である。吾人は吾人に与へられたる刹那、刹那を最も有効に用い、全我を挙げて学業の獲得に邁進し、以て大いなる負託の任に堪え得ねばならぬ。その精神をはつきりと自覚し、之を実行に移して初めて文武一如の勇者と言ひ得る。

諸子よ、希はくは国家の要求と合致する、立派なる医士となれ。立派なる医士となれ。

（立つて大きく医士と書かれる）

今日幸にして諸子と相見える事を得一言所懐を述べる。

（先生の眼と一同の眼はがつちりと合つた。そして暫らく離れない。）

氏は、常々「医士」という語を用いていた。「医者」でも「医師」でもなく「医士」としたところに、氏の思想が端的に示されている。単に、医術を行う者や、医術を解く師ではなく、医術を志す士大夫たるべしという考え方である。士大夫は、高い理想を掲げて、政治、文化、社会に対して責任をもち、国を支え人々を支える役割を担う。いのちを守るための医術は、個人の技術や特定の人間に対する行為を超えたものという認識があったのだと思う。人々のいのちを守るためには、医術以外に何が必要であるか、何をすればよいか、ということも考える立場である。「民は国の本である」とする江戸時代の民本思想の延長上にある考え方といえる。全人的医療の実践者として医士を規定していたのだ。

この最終講義では、時節柄「皇国」という語が繰り返されていて、現代では違和感を禁じ得ない。しかし、「皇国」という語を「すべての人々」という一般的な語に置き換えるならば、医士として人々の信頼に基づく使命を實踐せよ、と解く氏の主張は決して古びたものではない。信頼とは「尊い人命を委託してその治療を許すということ」であり、使命とは「この信頼に添ひ得る立派な医士となること」であるという。治療は許されて行うものであり、信頼を獲得することが最優先課題であるとする患者主体の考え方は、ヒポクラテスの箴言にも通じる。仁術としての医道の真髓である。

また、「一期一会」と板書した上で「一時を閑寂の境に過し、その間に心を練り真の人間をつくる」と説いていることも注目に値する。三田定則初代学長が「誠」について説き続けたのと軌を一にする考え方である。物心両面で忙殺されることがたくさんあったとしても、心を鎮めて一瞬一瞬の出会いに集中し、その出会いを大切にすることが誠の人間形成に重要であるという。その上で、「一刹那は既に過去であり、死の世界である。又一刹那は未来であり、未知の世界である」と説き、今・ここにあることだけに集中することによって、未来の自分と出会い、未知を知ることが可能となり、自ずから道が開かれていくことを述べて講義を閉じている。厳しい社会情勢のなかで、自らは死の淵にありながら、学生たちに未来を託しているのである。

4 禅の道

『泰巖餘光』に掲載された岩手医科大学精神学講座教授だった三浦信之氏の追悼文によると、内山氏は東北大学助教授時代に「教而不嚴師之怠也」という扁額を掲げて研究していたという。厳しく教えないことは教師の怠慢であるという態度は、岩手医専着任後も一貫していたようである。

卒業生諸氏の追悼文からは礼節を重んじた内山氏の教育姿勢が伝わる。講義の際は、男同士の挨拶と称して毎回全員の名前を読み上げ、点呼されると一人一人起立して先生としっかりと目を合わせて

互いに黙礼をした。医専八期生・松谷忠彦氏の追悼文によると病理学の講義は四弘誓願文を板書することから始まったという。

四弘誓願文とは、「衆生無辺誓願度 煩惱無量誓願断 法門無尽誓願学 仏道無常誓願成」の七言四句で、「すべての菩薩が共通して発する四つの誓願。衆生を救おうとする衆生無辺誓願度、煩惱を絶とうという煩惱無量誓願断、すべての教えを学ぼうという法門無尽誓願知（または学）、最高の悟りに達しようという仏道無上誓願成（または証）の総称」である（『大辞林』）。医道を仏道の学びと同質のものとして捉え、利他的で我執を捨てた態度、たゆまぬ精進、そして謙虚な学びの姿勢と向上心をもって学生教育にあたっていたことがわかる。講義の中で「医者」ではなく「医士」とたれとの教えを展開しているが、仏教思想に基づく高い倫理意識による教育理念が氏の言動の端々にほとばしり出ている。同じく松谷氏が紹介する「心ここにあらざれば視れども見えず」「最善の道が一つある」という内山語録は今なおわれわれのところに響くものである。

このような氏の求道的な精神は、学生時代から瑞巖寺で続けてきた参禅の帰結であり、当時盛岡にはなかった参禅会設立の動きにつながっていく。

着任の翌年、1937年、学内では帰敬会を発足させる。三浦信之氏の追悼文によると「宗派を超越した」「仏教会」である。三浦氏の追悼文はその詳細を記録する。第1回は1937年11月11日に開催され、内山・三浦両氏をはじめ学生ら10名が集まって、佐々木哲郎氏を招いて木津無庵著『新訳仏教聖典』の講読が行われた。場所は法医学教授・黒川広重氏の自宅である。その後、三浦信之氏の家や病理研究室、薬局長・福田鉄雄氏宅を輪番会場として、第9回には『新訳仏教聖典』を読み終わっている。第13回からは場所を共同会館（後述）に変え、『歎異抄』『般若心経』『十七条憲法』などさまざまな仏典の講読を続け、1942年まで64回、回を重ねている。1943年は学徒動員の動きや内山氏の体調不良により開催されていないが、1944年4月12日に第65回が内山氏の病室で開催され『歎異抄』を読んでいる。内山氏の死去後は精神科が主体となったようだ。三浦氏は1950年第85回までの記録を認めている。

緩和治療の概念も方法も希薄だったこの時代に、最終講義や帰敬会が想像を絶するがん終末期の疼痛の中で行われたことを考えると、余人には真似のできない教育者の態度をみることができる。

また、内山氏が師事していた禅門・三浦承天老師は追悼文のなかで、「人間の真価は苦しみに苦しみを重ね努力を以て敢然としてその艱難を凌ぐ時苦しみが大きければ大きい程その人の真の光を発するものなのである。苦悩を越えた人の死顔は美しいものである。雪後始知松柏操、事難方見丈夫心だ。内山さんも随分苦しまれた人ぢや。真剣に苦しまれた」と述べている。美しく真剣に苦しみを重ねた内山氏にとって禅の求道は終生のライフワークだった。

1943年、内山氏のサポートにより盛岡市の長松院で禅の求道会が発足する。この稿を成すにあたり長松院から『盛岡禅道会三十周年記念会誌』（1974年11月）をお借りすることができた。その中には、「創立の恩人内山先生の追悼」という一節が立てられ、前節でも述べた寮友黒川利雄氏、内山門下の三浦新也氏（医専10期生）、長松院住職らの追悼文が掲載されている。

盛岡禅道会設立の経緯は上記記念誌のなかの創設者・宮田荘六郎氏の「なぜ会を創設したか」に詳しい。三浦氏は、裕福な商家に生まれながら破産の憂き目に遭う苦勞の中で、各地での参禅を重ね、盛岡にも禅の道場を設立したいと考えるようになっていた。その思いをただ一人本気で受け止めたのが内山氏だったようだ。

（社用で上京）帰省後、直ちに長松院の方丈を訪問して、それより四年間、随時会の創立を力説し続けた。その後、内山先生を誰の紹介も無く訪問した。先生は無名の青二才の私に対し、春の陽光の如く温く、ご親切に御指導下された。往年、独逸留学中、世界各国の俊英と共に研究に優

劣を競われたためか、流石にその視野は広く、その思慮は深く、実力日本一流の地位に就いても良いお方と思考された。先生は禅についても、又、瑞巖寺等の事情についても、ご経験とご造詣豊富で啓発される処は多かった。（中略）

私は会の創設まで、幾度か落胆し消沈した。その終りの四年間、内山先生に慰められ、励まされ、もったい無い程の積極的御指導と御協力と御後援を頂き、幾度も勇気を奮い起こした。

この禅道会は今なお参禅会を行っている。内山氏が粉骨した岩手医科大学における倫理教育の道筋は「医療人たるまえに誠の人間たれ」という学是として受け継がれた。内山氏が終生持ち続けた禅の求道精神は盛岡の地にしっかりと根付いたのである。

5 後藤英三氏と今野八重女氏の追悼文より

『泰巖餘光』の追悼文はそれぞれに氏の教育・研究姿勢を伝えていて興味深い。本稿では『泰巖餘光』を中心に、戦中期を含む黎明期の核となるできごとを抽出するものであるが、『泰巖餘光』には、黎明期の後に続く拡充期に活躍した本学関係者の寄稿もある。その中から二点の追悼文を紹介しよう。

一つは、『三田俊次郎先生伝』の著者で、眼科医の傍ら俳句の創作や文筆活動も展開した後藤英三氏（医専8期生）の文である。久保田万太郎に師事した俳人でもあり、学生時代から小説を書いていた文筆家である。『岩手医科大学四十年史』の編集にも携わり、後藤杜三の筆名による『わが久保田万太郎』（青蛙房、1974年5月）で、第5回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。氏の達意の文が綴る「内山先生の憶ひ出」は、公私にわたる内山氏の素顔を伝えて一読に値するものなので、ここにほぼその全文を再録する。

内山先生は人も知る通り、禅門に深く帰依してゐられ、当時（昭和十一、二年頃）松島瑞巖寺の住職、現妙心寺派管長三浦承天老師のもとに参禅してゐられた。老師は私の郷里札幌市の円山瑞龍寺の住職をも兼ねておられたので、私は中学生の頃から数回門を叩いたことがある。何かの折に老師が私のことを内山先生に語られたものとみえ、病理学の組織標本鏡実習の時「こら、余り怠けるやうだと、ぽかつとゲンコツを一つ喰はせるやうに和尚に頼まれたぞ」といきなり肩をたゝかれたのが辱知を頂いた始まりだつた。

先生の円満な中にも毅然としたものを含まれた御性格は、たゞに生来のものであつたばかりでなく、篤い信仰によつて一層磨かれたものではないだろうか。学内にも「参禅」の集りを作る計画や、三浦老師を招いて講演を願ふこと等も考へてゐられ度々お洩しになつていた。

三浦老師も屢々「内山は面白い医者ぢや、薬を盛ることは一切知らんさうだが、あの男こそ良い医者だ、良い医者だ。」と語つてゐられた。（中略）

憶い出すもう一つのことは（これは当時の圭陵会新聞に記事として書かれてあつたと記憶するが）、先生が他の教授から試験の監督を頼まれてゐるのをつい失念して仙台行きの汽車に乗られ（当時先生は御家族を仙台に置かれてゐたので週に一回くらい帰仙されるのが例だつた）たが、仙台の近くまで来てから思い出された先生は勿論試験の時間には間に合はないし、当然他の教授が代行して事なく済んでしまう事柄とは知りながら、持ち前の強い責任感から、直に下車して次の下り列車で盛岡に引き返されたのだつた。

此のやうであつたので、学生間の人気徳望の高さでは解剖の二井教授と共に相壁であつたと言

つても過言ではないであらう。偶々吾々のクラスで、学生の訓育に当つて頂く学年担任とも言ふべき教授をいたゞく事が屢々論議された。勿論学則には無いことであつたし遂に実現はみなかつたけれども、若しその制度が実現される時には吾々のクラスでは内山先生をいたゞこうと言ふことは一人残らずの意見であつた。

先生は学生や教室員ばかりでなく、教室の使用人達を可愛がることも厚かつた。仕事の為に夜まで使はれた時などは彼等の為によく菓子類を買ひ与へられ、御自分も一緒にそれをつまんで談笑された。今はどうか知らないがその頃は桜山神社の境内におでんやゆで卵を売っていた店があり、助手が鍋を持つては嬉んでよく買ひにやらされたものだつた。

前記のやうにお独りで学内病理学教室の一隅に起居してゐられた先生は朝の御起床はかなり早かつたが、すぐ袴を付けられ早朝に御登校になる初代校長の三田俊次郎先生の所に朝の御挨拶にゆかれるのが例のやうであつた。洋服を着られるとあの堂々たる巨軀に蝶ネクタイを結ばれて仲々肅洒瑞然たるスタイルであられたが、この朝夕の袴姿は、着物も共に質素なものをツンツルテンに付けられ、手拭を腰にぶらさげ、素足に藁草履といふ、まことに明治の書生つぽ然たる風態であられた。夜、すぐ近くの本町郵便局隣りの銭湯に行くのにもこの袴は脱がれなかつた。

その洋服姿も和服姿も共に印象深い姿ではあつたが、然し何と言つても、病理解剖の執刀にあたつて、必ず屍に合掌される白衣姿こそ見るものをして襟を正さしめる虔敬そのものゝ、比類なく印象深い姿であつた。私が先生から得た最大の感動はこの姿であつた――。

後藤氏が中学時代に内山氏の師・三浦承天老師に接していたというのも不思議な因縁である。そして、病理学の組織標本実習のときのエピソードは、老師を通じて後藤氏が入学したことを知った内山氏の思いを伝える。医学を学ぶ自分の教え子が、自分と同じ禅の師と繋がっていたことを驚きつつ、自分と志を同じくする学生が目の前にやってきたことを手放しで喜んでいる。

三浦老師が繰り返した「良い医者だ、良い医者だ」という内山評にも深い響きがある。第10代本学学長・第8代本学理事長の小川彰によると、草創期の本学は、岩手の医の貧困を克服するために一人の名医よりも百人の良医を育成する医育を実践していたという。内山氏こそ真の良医であつた。

失念していた試験監督の責務を果たすために間に合うはずのない列車にのって盛岡に戻ったり、学生から訓育の指導者に選ばれたりしたというエピソードは、信義を重んじ、信頼関係によって他者とつながっていた誠の人間であつたことを物語る。

また、看護師・相談役として本学に60年の長きにわたって奉職した今野八重女氏の語る内山氏の姿も印象的である。患者に寄り添う医療人としての職務を全うした今野氏ならではの視点で述べられている。追悼文を一部抜粋して再録する。

(思い出の) 先づその一は医専初代の校長三田俊次郎先生が御存命中前学長三田定則先生が台湾の大学のお休みを利用され東京のお宅へ御帰りの節に俊次郎先生が私に向つてこんな事を申された事が御座いました。それは自分も老齢のことゝて校長としての業務も難儀になつたから早く定則先生に彼方の大学をお辞めになられてこちらの学校並に病院を見て呉れる様に頼んで来いと申されますので二、三回上京した事が御座いましたが、その度毎に必ず定則先生の申されます事は「お前さんが帰られたらナスお父さんに病院では佐藤三千三郎さん学校では内山さんが病院と学校の宝だと思ふから決して辞めさせない様に伝えて下さい」と申されました。この事だけを申し上げても皆様に内山先生の御人格がよくおわかり下さることゝ存じます。

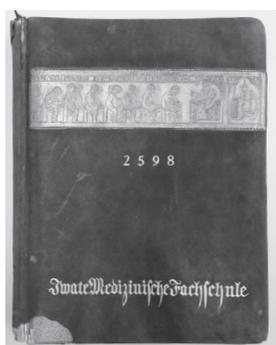
その二はあの当時は解剖を御家族にお進め致しましても死んだ後までも八つ裂きにされるのは

可哀想だとか罪だとか申され、なかなかおいそれと応じて下さる方が少なかったのです。ある日内科の患者さんが死亡されましたので何とかして解剖して見度いと先生が申されますので私もいろいろそのお母さんにお進めいたしましたのですが、何としても嫌だと申されて居りましたがやつとの事でそれではあなたにお任せしますとの承諾を得ましたので解剖室にお運び致しましたところお母さんが私にも見せて下さいと申されお室にお入れ申しましたのですが、内山先生が入つて来られ死者に対する礼と申しませうかメスをお取りになられる前に誠にお立派なお態度で合掌されしばらく読経なさいました後おもむろにメスをおとりになります御姿を拝見しました。彼の母親は遂にお泣きになられましてもう後は見なくともよくありますからと室を出られましたが、うちの子供は何と云ふ幸福者でせう病氣中は至れり尽せりの御治療をいただき、よくよくの寿命で亡くなりその後もこの様にお偉い先生にあの様な莊嚴の裡に解剖していたゞきその上あの多数の生徒達の為めに何等か得るところが御座いましたなら、あなたの先程申されました様に死んだ後も医学に貢献することの出来ますこともよくわかり、これで本当にあきらめる事が出来有がたい有がたいと涙ながらに語られたことを記憶して居ります。

三田定則と正面きって議論したり、ときには、三田定則に異を唱えることもあったりしたという内山氏であるが、今野氏の証言によると定則に深く信頼を寄せられていたことがわかる。また、剖検における真摯で謙虚なエピソードは、求道家としての氏ならではのものだろう。

6 戦争と内山氏

戦況の悪化に伴い、学徒動員が始まると、本学でも繰り上げ卒業が行われたようだ。本学には戦時下の卒業アルバムの大半が散逸してしまっているなかで、医専7期生（1938年3月卒業、卒業生124名）の卒業アルバムが残る。学生の大半の写真は掲載されず、氏名だけが並んでいる。写真が掲載されているのは30人余りだけである。アルバム作成時には戦地に赴いていた学生がかなりの数いたと思われる。同窓会の名簿を繰ると戦時中の医専7期生の死亡者数は18名で、うち13名が戦死または戦病死である。この卒業アルバムには着任後間もない内山氏の肖像写真や病理学の実習風景の写真が掲載されている。『泰巖餘光』掲載の写真とともに、往時の内山氏の壮健な姿を偲ぶことができる。



澁刺とした姿の内山氏が、教え子を戦地に送り出すときには、熱い情をもって激励したことが数々の追悼文に記載されている。また、戦地にある教え子たちを励ますために毎日のようにペンをとって手紙をしたためていた姿への言及もある。病の床にあってなお、教え子の身を案じて筆を執っていた。『泰巖餘光』は講義録に続いて、「先生のお便り（戦地の弟子へ）二編」として戦地の教え子への便り

を掲載する。以下はその全文である。

(その一)

昭和十八年七月十六日のお便りより。

ガダルカナルに、アツツに、キスカに教え子を失つた今となり、いよいよ戦場が身近に迫つた感を深めています。何にしても今日に至つて空襲一度の体験も得ない有難い皇軍の御働きに感謝してゐますが、それにつけても生死涯頭にあらざる身がお題目として、滅私奉公とか陣頭指揮とかの言葉を使はずに、先づ背私向公、陣中指揮の努力を怠つてはならないものと思つてゐます。朱子学派の儒教で孝経に「名を挙げ道を行ひ名を後世にあげ以て父母をあらわすは孝の終りなり」と教え幕府の政策で大義名分をかくしたのが、教育の大きな誤りなりと云はれます。然しこれを考へますと孝経は七、八才の子供に教へる書で専門大学等の教科書はこれより以上のものでなければなりません。功名を得る事に努めるのが忠孝の道と信じてはとんでもない事になります。「名を棄て実を採る」と云ふ言葉がありますが、これも名誉をすて、金を蓄めると解しては飛んでもない誤りで、勲章を求めずに報恩の至誠を致す義かと思ひます。

一昨年当りから私は医師、といふ言葉をなるべく使用しないで、生徒は医士になれといふて来ました事は前に申上げた事があると信じます。最近山崎佐博士の「皇国医道概論」なる講話を仙台で聞いて愉快を感じました。

大宝令、養老令以来日本の医は朝臣即ち官医であり、従つて謝礼は一切うけるものでなく、治療を受けた患者は、その経過、医者の方を御役所へ報告するものであつた由、これにより官医の上昇抜擢が行はれたものとの事です。尤も医官の位は五位以下たるべきものであつた事はよく考へて見ねばなりません。それでもその医官は関白と膝を交へて会談する資格は認められていたものなそうです。聖徳太子の頃に福田院、悲田院、施薬院、療病院を設けられた事は知つてゐましたが、あの施薬院は「やくいん」とよむので「せやくいん」ではないのだそうです。文字は支那にとつてよみ方は日本読みだそうです。それは民は「おほみたから」であるからこれに施すといふ事はないのだそうです。足利幕府が施薬院を作つたがそれは「せやくいん」と読んだそうです。この事が日本医道が支那や欧州の医の理念と根本的の差のある点だと解りました。鎌倉幕府が出来た時でも医は朝臣でありましたから、征夷大將軍でもそばには医者は居らず、病になつた時には朝廷から医師である朝臣が朝命で下向して看りする掟であつたそうです、がしかしこの朝臣が京に帰る時に將軍から禮物を貰ふ事が起り、こゝに医者が謝礼を予期して治療するといふ墮落の兆があらわれ、やがて僧にして医なるが現はれこれから僧服を着る事となつた。

戦国になつては各大名が医者を抱へ、名医は却つて高給をくれる大名の所に居るといふ現象となつたし一方僧医から法印とか検校などの位があらはれると一般人からも金で需めに応ずる町医者が栄える事になりたるものとの事、なほ藤原時代の頃三者といふて儒者易者医者と申したるものがその後儒者の方から抗議現はれ、医者とは一列に呼ばれたくなしとなり、順徳帝建保年間の職人歌合せといふものに七十一の職人を挙げたる内に医師は弓師の上位に入り、職人になり下り、土御門帝の時に著されたる明月集（藤原定家卿）北面の武士ともある者が医師の家に集ひて蹴鞠を弄びたりとの事天聴に達し、あさましき事なりと仰せ出されたるを定家もむべなり、と記したるものなりなど、色々の話を聞くにつけても医道本然の姿に立ち返らしむるには、医人各人の教養、品位を高めなくてはならぬ事とくやしく存じ申候。しかして已に大戰で医士が軍医として、官医となりたるこの機こそ、銃後も官医としての素質向上に努力せざるべからずと平素からの素

懐を強く感じたる次第なり。儒者と同列の医者が排撃されるならまだしも、医者、芸者、役者と三者水商売と称されるに至りては誠に沙汰の限りと申すべし。大東亜建設に日本人の立場につきても又一考すべきものあるにあらずやと存じ候。貴見何如。

七月十六日

内山 泰

(その二)

昭和十九年五月三十一日のお便り

御見舞有難う。廿六日どうやら教壇に登る事を得二ヶ月来の宿望を達し愉快に候。同夜より腹水蓄まり初め候も覚悟の前、もし是が吸収し得たらまた登校致さんと存候。若い人は呉々も無理をしてはならず候。

「その一」の便りでも「医士」という語を用いて、私利私欲を捨てた高い教養と品位をもった医療行為の重要性について熱く説いている。この長文の手紙は、従軍医として身も心も消耗しながら戦場にある教え子にとってどれほどの励みとなったことだろう。また、「その二」では病を押して教壇に立てたことの喜びと、腹水がたまるほどの深刻な病状にあってなお再度教壇に立つことを切望する気概が記されている。驚くべき教育への気迫である。

ところで、「その一」は「ガダルカナルに、アツツに、キスカに教え子を失つた今となり」と書き出される。氏の無念が伝わってくる。ちなみに1931年の満州事変から1945年第二次世界大戦終結までの期間に亡くなった卒業生の数は205名に及ぶ。1932年3月に医専1期生の卒業式が行われているから、戦死病死の別はさておき、いずれも医道半ばでの無念の死であった。圭陵会名簿によるとこの間の戦死・戦病死者は154名、名簿上単に逝去と書かれている死者の数は51名である。時代の検証材料として死亡者一覧を以下に掲げておく。

戦死した卒業生の方々

区分	戦死・戦病死者数	逝去者数	計
第1期生	9	1	10
第2期生	12	9	21
第3期生	5	9	14
第4期生	12	9	21
第5期生	10	3	13
第6期生	16	4	20
第7期生	13	5	18
第8期生	11	1	12
第9期生	8		8
第10期生	8	2	10
第11期生	20	4	24
第12期生	18	1	19
第13期生	10	2	12
第14期生	2	1	3
総計	154	51	205

7 共同会館のこと

内山氏が本学に着任したのは本学に共同会館が建設されてすぐのことである。氏が主宰した帰郷会も1937年からは共同会館で開催された。以下、本学の同窓会誌『圭陵会会報』「共同会館物語」一～三の記事⁽²⁾や、圭陵会編『あゝ生成の徳のあと 岩手医科大学圭陵会五十年史』(1983年12月)掲載の庄司三郎氏(医専15期生)「共同会館の利用」、川村清氏(医専5期生)「学生共同会館の解体」を参照しつつ、時代を象徴する建物としての共同会館について述べる。

前稿では、実習施設等の建設を巡る学生の抗議行動の顛末(同盟休校事件)についてその経緯を明らかにした。同盟休校事件は、結果的には三田俊次郎と学生の絆を強めるものとなった。しかし、学校当局に生徒会・学生会といった学生の自治的な活動を牽制する思いがなかったとはいえないだろう。学生が集まって活動するための組織も自治会館のような建物も学校側が作るということがないまま年月が経過した。

ところが、医専1期生、2期生と卒業生を送り出すころになると、学校をあげて送別会が開催され、在学生在がさまざまな芸能や演劇を披露するようになっており、その打合せや練習のための施設が必要だという声が高まっていた。1934年、共同会館建設への動きがはじまった。

そして1938年ついに学生たちの悲願だった共同会館が竣工する。圭陵会は「共同会館開館記念特別号」を発刊し、自分たちの会館ができた喜びを伝えている。時代の趨勢により本学同窓会である圭陵会が報国会と改称されたことになり、1942年共同会館の名称も報国会館に改められたようだ。同じ頃、下宿先の見つからない新入生20名余の寮(不来方寮)として利用されるようになっていた。

内山氏死去の翌年、1945年3月に盛岡に空襲があった。5月にムツソリーニ、ヒットラーが相次いで亡くなり欧州では戦争が終結していたが、日本はいまだ戦火に包まれていた。7月には釜石で艦砲射撃があり火災が発生、盛岡でも空襲警報のサイレンが頻繁に鳴り響くようになっていた。本学の共同会館を建物疎開させるようにとの当局からの勧告が日増しに強まったが、病院長はじめ学校側は必死に抵抗していたという。しかし、ついに、10年しか使用していない立派な建物を取り壊すことが決められた。「共同会館物語」によると全校生徒総出の建物疎開は8月に入って行われ、1週間を要したとある。1945年入学、医専18期生の高山和夫氏(のちに本学中央臨床検査部臨床病理部門教授・本学名誉教授)が自身の日記をもとに1945年の3月から8月15日までのできごとを年譜に編んだものが『岩手医科大学四十年史』に掲載されている。それをみると共同会館の建物疎開は7月下旬だったようだ。日記からは戦争末期の本学の教育のようすがよくわかる。また、共同会館の建物疎開がどのように行われたかも明らかになるので、ほぼ全文を以下に再録する。(便宜的に漢数字を算用数字に改め、「数」などの略称を改め、句読点を補ったところがある。また、紙幅の関係上原文の改行を「/」で表記したところがある。)

昭和20年入学試験

3月23日 筆答試験(作文・題「同胞」、国語、数学、歴史、理科(生物・物理・化学))

24日 体格検査、レ線、ツ反、口答試験/25日 ツ反判定



医専第七期生卒業アルバムより

- 3月31日（午後5時）合格発表
- 4月20日（金）入学手続に学校に出頭
 ○入学金10円／○報国会費1年分 合計22円
 ○授業料1期分100円／○教練費10円
- 4月21日（土）午前九時より仮入学式（五階大講堂）内科二宮教授 訓辞
 教室にて黒川教授より学則、中屋教授より修練について
- 4月23日（月）より授業開始
 「修練」（医学概論的）及川学務課長・黒川・二宮・二井・菅（外科）・田沢・中屋・根本の各教授。
 「教練」石田大佐・鳴海教官。「道義人文」高橋康文先生（岩大）
 午後 上田グラウンド開墾
- 5月1日より雨天以外は毎日滝沢の農場作業（5時半起床、6時半盛岡駅集合、6時50分発、滝沢下車）
- 5月2日 ムソリーニ射殺さる。／5月3日 独降伏説、ヒトラー総統死亡伝えらる。
- 5月4日 赤軍声明で1昨日ベルリン占領を宣す。ヒトラー戦死確定 欧州戦終結
- 5月8日 中屋教授 壮行式／5月12日 中屋教授を盛岡駅にて送る。
- 5月19日 内丸の町内隣組と共に防空壕用の松の木の伐採に北山に。
- 6月2日 簡閲点呼予備検身（城南小）
- 6月3～5日 公休 点呼予習のための教育招集（医専生は3人17期の人2人とで）
- 6月10日より 援農作業（田植）（築川村）
- 7月1日 入学式（新入生150名以上）第18回開校記念式。三田定則校長、東京より来盛式辞
- 7月3日 教練素養試験
 問題1 軍人精神を説明せよ／2 建軍の本義／3 学生の徴兵猶予廃止の理由および医学徒の入営延期の理由／4 軍紀の必要の理由／5 毒ガスの種類および症状
- 7月4日 病理（黒川教授）、医化学（及川）開始／7月5日 生理（盛岡農専・生物専攻教授 鳥生先生）／7月6日 外科総論（菅）、物理（土居）
- 7月9日 解剖学開講（二井）
 毎日のように東山堂や本屋をのぞき医書渴望独乙語Lehrbuchを写本、友人よりインクを頒けて貰う。
- 7月14日（土）朝 空襲警報 6時頃解除
 7時の列車で滝沢村の除草作業小豆畑うねおこし
 11時の列車で帰盛予定が1時間半位列車おくれ（空襲警報 機銃掃射うけ、小型爆弾攻撃）
 あったというも、被害なしと。釜石市、艦砲射撃うけ火災発生。
- 7月15日（日）朝5時 警戒警報、8時半空襲警報、退避信号、あるも敵影見ず。
- 7月21日 教練、石田大佐の訓示（志望について考科調書作る）
- 7月23日（月）黒川病理の時間は不来方町の「会館」建物疎開（取毀し）作業手伝
- 7月24日 会館破壊のあと仕末
- 7月28日 4ヵ国共同宣言（英・米・支・ソ）あり。若田大佐のこれに対する本土決戦必勝の話あり。
 午後1時 体練—根本院長担当 上田グラウンドで闘球（ラグビー）夜9時少し前、警報—
 空襲警報に至るも被弾なし（盛岡上空を敵旋回）。青森、弘前被害の情報。深夜（1時）就寝。
- 7月31日 上田グラウンド草むしり、および防空壕作り
- 8月1日 今夜か明日、米国の防空記念日で、敵は日本本土を焼土化する計画を立てていると軍

- の方から情報が入っていると云う友人からの話により、真偽不明のまま一応準備して就寝
- 8月2日 無事に朝を迎う。朝食(粥) 晩(雑炊・すいとん)
大本営発表で本土への敵侵攻に対する準備が進んでいると
- 8月3日 陸軍病院の地下潜入の作業勤労奉仕
安部館、厨川城跡(本丸)、厨川八幡地下墜道掘り、軍人と一緒にやる
- 8月4日 学校の作業、防空壕資材(除去建物木材)(8~10時)を学内より裏内外へ搬出
教練(10~12時)
- 8月5日(日曜)北上川上流の三田農園で医専生ならリング領けてくれるとの話をきき友人と2人で行く、農大の学生(勤労奉仕で来ている)が出て来て昨年より3倍位「供出」があるのでわけられぬ、秋には少し頒けられるかもと云われ獲物なく落胆して帰る。途中高松の池で休む、池で泳ぐ人を見る。
- 8月6日 解剖(二井) 病理(黒川)
- 8月9日 朝警戒警報。6時頃に空襲警報、9時半解除、登校途中また発令、その後波状的に発令、11時半敵機(双発7・単発3ほか13機)被弾なし、午後3時頃解除。大本営発表、ソ連の北満進撃
- 8月10日(金)5時警戒警報→空襲警報 東北各地に艦載機波状来襲
10時半盛岡に超低空で小型機侵入。ロケット弾? 駅方向に急降下で投下また機銃掃射(約7機) 駅附近に火と煙を遠望、12時頃再び14機来襲、同前の銃爆撃、5時半解除
- 8月15日(水)正午、(玉音放送)重大放送ありと学校中庭御親影奉安庫前に集合

入学試験の内容や授業料をはじめとして、戦況と併行して本学の戦時下教育の実態が詳細に記録されており興味深い。入学後4月23日に「修練」により講義がスタートする。今でいうカリキュラムガイドンスのようなものであったか。医学教育よりも「教練」と称する戦時教育が行われている一方で、「道義人文」と称する倫理教育も行われていたことは、内山泰氏が主宰する帰敬会と併せて、政治的社会的な動乱期にあつて自己の精神力を高めるための教育が医育に組み込まれていたことを物語る。

「上田グラウンド開墾」「毎日滝沢の農場作業」の文字の行間には「医学を学びに来たのに」という思いが滲む。一方「生理学」「病理学」「医化学」「解剖学」が初年次の1学期にいち早くスタートしており、医師養成が急務だったことも理解される。7月9日には「毎日のように東山堂や本屋をのぞき医書渴望」とあり、さらに、「独乙語Lehrbuch(教科書)を写本、友人よりインクを分けて貰う」の記事も当時の医学生の状況を伝えてあまりある。

さて、共同会館建物疎開の記事をみてみよう。7月23日の記事に「黒川病理の時間は不來方町の『会館』建物疎開(取毀し)作業手伝」とあるので、建物疎開が7月23日、あるいはその少し前に始まったことがわかる。翌24日には「会館破壊のあと始末」とあるから、24日にはほぼ作用を終えていたのだろう。共同会館を壊すのに1週間ほどを要したという証言もあるので、建物疎開のスタートは7月20日前後だったのかもしれない。

建物疎開のあと7月28日「体練」の時間に根本四郎病院長が上田グラウンドでラグビーをさせている。防空壕作り(7月31日)、「陸軍病院の地下潜入の作業勤労奉仕」、「軍人と一緒に」やった「安倍館、厨川城跡、厨川八幡地下隧道掘り」などの記事の中で唯一学生らしい記事である。涙をのみながら共同会館を壊した学生たちに、ラグビーの試合をやらせてあげた病院長の思いが伝わってくる。8月5日、三田農園へりんごをもらいに行ってもらえないでがっかりして帰る途中高松の池で休み、「泳ぐ人を見る」とある。放心の学生2人の姿が目浮かぶようである。

7 女子医学専門学校のこと

冒頭書いたように本稿に先んじて、著者らは『創立120周年記念誌』を編集した。本稿で扱った戦時中のできごとをはじめ、その後の岩手医科大学への昇格、三田定則の奮闘、昭和の高度成長期における本学の拡充・発展の軌跡については同書を参照されたい。刊行後、同書を丁寧に読んでくださった圭陵会会員で岩手大学名誉教授・石川精子氏から、一通の書状が届けられた。石川氏は、1947年に福島女子医専から本学に転校し岩手医専18期生として1949年に卒業し、1951年4月に第10回医師国家試験を受験されたとのことだ。偶然ではあるが、石川氏は前節7で引用させていただいた日記の書き手・高山和夫氏と同期である。

『120周年記念誌』編集作業の過程で収集した情報のなかに女子医専からの転校生に関するものは皆無だった。『120周年記念誌』に「昭和21年（1946）医専の17期生の入学式には4名の女子学生の姿があった」と記載したが、これは『創立五十周年記念写真集』（1978年6月）に掲載された右の写真のキャプション「医専18期生の女子学生（昭和24年頃 中庭食堂前）／医専17期から女子学生が入学してきた。／左より小野寺エイ子（鈴木）、小野寺フミ（赤塚）、赤間静子（高橋）、石川精子（鈴木）」とあるのを誤読していたことと転入生の事情が不明明だったことによる誤記である。正しくは「昭和24年（1949）医専の卒業式には4名の女子学生の姿があった」ということになる。この場を借りてご指摘くださった石川氏に御礼を申し上げるとともに、記念誌の記述の不備をお詫びしたい。しかも、この訂正記述だけでは、石川氏をご指摘くださったような女子医専からの転入生の事実は依然として歴史の闇に埋もれてしまったままとなる。



石川氏は岩手県のご出身で、1945年に福島女子医学専門学校の第2期生として入学されたが、敗戦時の時局の混乱とすさまじい食糧難から、実家のある岩手から離れての勉学に危機感をいだき、1947年に岩手医専に転入学されたとのこと。同時に秋田女子医学専門学校から2名、福島女子医学専門学校から4名の転校生があったという。在学中に1名が死亡し、1名が退学、結果的に医専18期生として卒業したのは写真の4名だったとのこと。石川氏にはその間の事実について稿を改めていただくことで、今まで不明だった戦時中の国策としての女医養成の経緯が明らかになることを期待したい。

ちなみに『福島県立医科大学年史』（1988年3月）によると、福島でも本学の草創期と同様に、明治期には医術講習所→須賀川医学校→福島医学校と医学教育の道程は紆余曲折し、福島県議会での激しい存廃論議を経て、1887年に医学校が廃止された。戦争末期、深刻な医師不足から政府は女医の育成を行うことを決めた。1943年、5年制の福島県立女子医学専門学校設置が認可され、その開校とともに信夫郡・伊達郡・安達郡の三郡共立の福島病院が県に寄付され、福島女子医学専門学校の附属病院となった。戦後、福島女子医専は大学に昇格することになり、1950年男女共学の福島県立医科大学（旧制）が認可され、1952年には新制の福島県立医科大学となる。

明治期の医師不足の悩みは、岩手県においても福島県においても同じであり、現在なお抱えている大問題である。両県ともに時局の混乱や教育改革の煽りを受け続けてきた。そしてそれはまた日本の地域医療全体の問題でもあった。そのような歴史の流れと現代の問題を考えるにあたって、本稿で述べてきたような内山泰氏に代表される戦時下の医学教育のありようは、われわれに医育のあるべき姿を示してくれる。

注

- (1) 平林香織・芳賀真理子・渡邊剛「岩手医科大学の軌跡(1)——草創期を振り返る——」(『岩手医科大学教養教育年報』第50号、2015年12月)、「岩手医科大学の軌跡(2)——医育の黎明——」(『同』第51号、2016年12月)
- (2) 『圭陵会会報』第151号(1975年3月)、同152号(同年5月)、同153号(同年8月)の3回にわたって卒業生によって連載されている。

*本稿を成すにあたり、盛岡市・長松院、高山和夫氏、石川精子氏に貴重な資料の閲覧や御教示を賜った。記して深甚の感謝を申し上げる。